

知の暴力にどう対抗するか

－ 科学者の責任 －

豊島耕一（元佐賀大学・理工・物理）

イントロダクション：学術会議の報告案について

過去の2つの声明を「継承」。毎日：「・・・ただ、軍事研究自体の是非や防衛省の制度への応募の可否は明記せず、幅広く解釈できる余地も残った。」¹

「軍事的安全保障研究」という造語の含む問題：東京新聞の望月衣塑子氏によると²、当初の「軍事研究」から、大西会長の「防衛省は軍事研究という言葉を使っていない、レッテル貼りだ」との主張でこの表現に変わった。

1. 防衛省からの大学への資金枠の拡大。

「軍事研究助成 18 倍 概算要求 6 億→110 億円 防衛省、産学応募増狙う」（東京新聞 2016年9月1日）

「基礎研究」ならいいのか？ 「デュアルユース」という言葉の狙いは？

（参考）葉隠，聞書第一：「又、学問者は才智・弁口にて本体の臆病・欲心などを仕隠すもの也。人の見誤る所也。」³

2. アメリカの理工系トップ2大学の例

Leslie の “The Cold War and American Science”⁴はMITとスタンフォードの軍学共同の歴史を詳述

3. アイゼンハワーの2つの警告

大統領離任演説⁵：軍産複合体の支配と、科学技術エリートの支配

4. 戦後の日本の学界の姿勢

戦後の学術会議の声明(1949年，1950年)，物理学会の「決議三」(1967年)

5. 科学者，科学界による核兵器批判，抵抗（70年代まで）

戦中：リーゼ・マイトナー，ジョセフ・ロートブラットの行動⁶

戦後：ラッセル-アインシュタイン宣言，パグウオッシュ会議，科学者京都会議

6. 科学者，専門家による新しい抵抗の形態

判事，検事らによる基地封鎖（ムートランゲン）⁷，「ファスレーン 365」⁸での “Academics Blockade”⁹

7. 非暴力直接行動（NVDA Non-violent Direct Action）

「ファスレーン 365」日本チームの経験, 「行為によるプロパガンダ」と「道徳的柔術」¹⁰

8. アメリカの道をたどらないためにはどうするか

8-1 「客観的」条件

学者の「経済的徴兵制」への抵抗, 「経常費」の維持, 個人の良心を発動させるための規範・制度, 抵抗組織・ネットワーク

8-2 思想的条件

組織の意志と個人の良心, 「責任ある組織上の不服従」¹¹, 「基礎研究なら問題ない」のか, 「公開ならいい」のか → 軍組織に「人間関係資本」の蓄積をさせてよいか? 軍関係組織・機関から資金を受けた研究者が, 平和の問題で自由に発言し, 行動することが出来るか? 軍が考える「平和」の概念とずれた発言をした場合, 研究費が途絶える心配をしなければならないだろう。(米国防次官補 D.ヒックスの発言: 米国は自由の国であり, 研究者が自らの役割を放棄するのは結構だ. しかし自由には二通りしかない. 口を開かず自由と金を受け取らない自由だ. ¹²)

学術会議会長私見項目 2 の問題

学術会議, 2016 年 4 月総会での会長私見 (小沼, 「科学」同年 10 月号):

「90%を超える国民が自衛隊に対して好意的な意見を持っているので, 少なくとも個別自衛権の観点から, 自衛隊の目的にかなう基礎的な研究開発を大学等の研究者が行うことは許容されるべきではないか。」

「個別的自衛権」の公認化の傾向への批判の必要性, 自衛戦争, 自衛隊肯定論と関わらざるを得ない. ひいては武力によらない国家防衛の問題へ.

→ 軍隊の「デュアル・ユース」問題¹³. 「防衛省」と同じウエイトで自国軍隊の「侵略予防省」が必要

9 軍事研究禁止のグローバル化

軍事転用される技術を予測し, 事前に禁止する国際機構 (R.E.Spier ほか, *Science and Technology Ethics*, 2002 年, p.211-212.

「守る」だけでなく「広げる」姿勢こそ重要. 九条も同じ.

おわりに

「ゴジラ」第一作での芹沢博士の選択.

戦争・兵器のための研究は「知の暴力」, 「知的暴力」と呼ぶべきではないのか? (cf. 言葉の暴力, 数の暴力, 構造的暴力, 文化的暴力, . . .)

筆者ブログ：「ペガサス・ブログ」 <http://pegasus1.blog.so-net.ne.jp>

筆者ツイッター：<https://twitter.com/yamamoto2007>

-
- ¹ 毎日新聞 2017年3月7日.
 - ² 岩波「世界」2017年6月号.
 - ³ 対訳 葉隠, p.72-73, 講談社インターナショナル, 2005年
 - ⁴ Stuart W. Leslie, “The Cold War and American Science: The Military-Industrial-Academic Complex at MIT and Stanford”, Columbia University Press (1993, 1994)
 - ⁵ 対訳を次に置いています：<http://ad9.org/pegasus/Education/docs/EisenhowerAddressJE.pdf>
 - ⁶ ジョナサン・シェル「核のボタンに手をかけた男たち」(大月書店,1988年)参照.
 - ⁷ Ulf Panzere, Peace Magazine Aug-Sep 1987. <http://www.peacemagazine.org/archive/v03n4p19.htm>
 - ⁸ Angie Zelter 編 “*Faslane 365 - a year of anti-nuclear blockades*”, Luath Press Ltd, 2008年.
 - ⁹ Stellan Vinthagen 他 “Tackling Trident”, Irene Publishing, 2012年.
 - ¹⁰ マイケル・ランドル「市民的抵抗」, 新教出版, 2003年, 123~124ページ.
 - ¹¹ C.E. Harris, Jr.他「科学技術者の倫理」, 丸善, 2008年, 8.8節.
 - ¹² 岩波「世界」2017年6月号.
 - ¹³ 豊島耕一, 「攻められる」ことと「攻める」こととの等確率性, 日本の科学者, 2005年1月号.